『日本体育大学大学院教育学研究科紀要』
第 5 巻第 1 号　2021（pp. 27 - 40）

【原著論文】

保育の領域「健康」における活動分析
―幼児のごっこ遊びに着目して―

笠井利恵*1・山根悠平*1・池野範男*2
*1 日本体育大学大学院教育学研究科博士後期課程
*2 日本体育大学

本研究は，保育の領域「健康」における幼児の遊びの実態を明らかにすることを目的とした．具体的には，幼児のごっこ遊びについて，保育の領域「健康」と「模倣」の視点から検討した．そのために，領域「健康」に関する DVD に収録された保育実践から 2 つの事例を取り上げ，教科教育研究の授業研究の方法で分析した．

その結果，他者との関わり，幼児の様相と保育者の支援，保育の領域「健康」の 3 点において両事例の共通点と相違点を示すことができた．他者との関わりでは，「他者の模倣」と「遊びの共有」が共通して見られたことから，ごっこ遊びにおいて他者との関わりが重要であり，その関わり方や対象は，年齢や発達によって変化することが示唆された．また，1 歳児は見立てて遊ぶ動作の模倣，5 歳児では変身して「なりきる」様子が見られたことから，幼児と遊びを共有しながら動作を意味づける声掛けや，幼児の表現を促す保育者の支援について検討する必要性があげられた．さらに，両事例とも領域「健康」に示される 5 つの内容に関連していることから，ごっこ遊びは，保育者や友達と触れ合い安定して活動に親しみ，遊びを通して食事や衣服の着脱などの生活習慣に触れることのできる活動であることが示唆された．

キーワード： 保育，領域「健康」，授業研究・授業分析，ごっこ遊び，

Analysis of Activities in The Content "Health" of Childcare
—Focusing on Pretend play—

Rie KASAI*[1] , Yuhei YAMANE*[1], Norio IKENO*[2]
*1 Graduate Student of Doctor Course, Graduate School of Education,
Nippon Sport Science University
*2 Nippon Sport Science University

The study aims to clarify the activities of children's play in the content of "Health" in childcare. Specifically, this study focused on "Health" and "Imitation" in pretend play. Two examples of childcare activities in the content "Health" included in the DVD were selected and analyzed using the method of lesson study.

As a result, common points and differences regarding the relationship with others, the activities of children and childcare teachers, and the " Health" of childcare. In relationships with others, "imitating others" and "sharing play" were same, so it is important to have relationships with others, and the ways and objects of these relationships change with age and development. In addition, 1 years old were imitating actions, and 5 years old were doing mimicry. Therefore, it is necessary for caregivers to consider how to give meaning to the actions and how to support children's performance when they share play with children. Both cases were related to the five contents of the domain "Health". This suggests that pretend play is an activity that allows children to interact with their nursery teachers and friends, become familiar with activities in a stable manner, and come into contact with daily habits such as eating and dressing through play.

Key Words: childcare, health, lesson study / class analysis, pretend play

1. 研究の背景

はじめに，本研究は池野ら（2020）及び山根ら（2020）の研究と連続するものであり，その発展・展開論文として位置し，幼児教育と学校教育との研究の交流を意図している．そこで，まずは幼児教育における活動から子どもの学びの豊かさを見付けるために，学校教育の授業研究の方法を適応し活動に意味付けしようとするものである．

現行の幼稚園教育要領（文部科学省，2017，pp.4-5），保育所保育指針（厚生労働省，2017，pp.13-16）及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領（内閣府・文部科学省・厚生労働省，2017，pp.7-12）では，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として，（1）健康な心と体，（2）自立心，（3）協同性，（4）道徳性・規範意識の芽生え，（5）社会生活との関わり，（6）思考力の芽生え，（7）自然との関わり・生命尊重，（8）数量・図形，文字等への関心・感覚，（9）言葉による伝え合い，（10）豊かな感性と表現，の 10 項目を挙げている．

このうち，第一に挙げられている（1）健康な心と体は，「幼稚園生活の中で，充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ，見通しをもって行動し，自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる」（p.4）ことが示されており，幼稚園教育要領解説には「自ら体を動かして遊ぶ楽しさは，小学校の学習における運動遊びや，休み時間などに他の児童と一緒に楽しく過ごすことにつながり，様々な活動を十分に楽しんだ経験は，小学校生活の様々な場面において伸び伸びと行動する力を育んでいく」（文部科学省，2018a，p.50）とある．このように，幼児期の学びが小学校の学習につながっていくため，幼児期には「小学校以降の子供の発達を見通しながら教育活動を展開し，幼稚園教育において育みたい資質・能力を育むこと」（p.45）が求められている．さらに，（1）健康な心と体は，保育の 5 つの領域の一つ「健康」（以下，「健康」）と関係していると考えられる．「健康」は「健康な心と体を育て，自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」ことを目的として示しており，「（1）明るく伸び伸びと行動し，充実感を味わう．」（文部科学省，2017，p.11）などといったねらいが 3 つ，「（1）先生や友達と触れ合い，安定感をもって行動する．」などの内容が 10 項目挙げられている．これらを踏まえ，保育者及び教師（以下，保育者）は，子どもが明るく伸び伸びと，安心して遊び，生活できるよう支援に努めることが求められている．

明石（2021，p.446）は，子どもの自発的な遊びは，心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習として位置づいていると述べているように，子どもにとっての遊びは，遊びそのものが学びであり，健康な心と体を育むために直結した営みであるといえる．園生活において子どもは，様々な遊びを体験する．中でもごっこ遊びは，どの年齢でも共通して見られる遊びである．保育用語辞典（谷田貝編，2019，p.146）では，ごっこ遊びについて，子どもが日常生活の中で経験したことを模倣して現実の遊びで再現したり，現実の物・人・事をイメージして象徴的に遊んだりすることを包括した遊びとして説明している．また，前田（2020，p.132）によれば，ごっこ遊びは，友達など人と関わる楽しさ，言葉のやり取りの楽しさ，物や社会事象と関わる楽しさなど様々な領域と重なり共鳴し，領域が相互に関連し結びついていると述べている．これに関連して，幼稚園教育要領解説においても，ごっこ遊びを例に取り上げて各領域の内容について説明されている．例えば，「表現」では，「ままごとの道具を見ることから家庭生活を思い起こし，そのイメージに沿って母親や父親などの役になってままごとを楽しんだり，あるいは物語を聞いてその登場人物に対する憧れの気持ちからごっこ遊びを楽しんだり，自分たちの物語をつくって演じたりする」（文部科学省，2018a，p.232）と示されている．また，「健康」では，幼稚園教育要領解説の内容の取扱いにおいて「幼児の遊びのイメージ，興味や関心の広がりに応じて行動範囲が広がることを考慮する」こととし，「例

えば，室内でままごとをしている幼児がイメージの広がりとともに，『ピクニックに行こう』と戸外に出ていくことがある．この場合，戸外にもままごとのイメージを実現できるような空間や遊具が必要になろう」（文部科学省，2018a，p.149）と示されている．このように，ごっこ遊びのような比較的動きの少ない印象を持つ遊びについても，幼児が十分に身体を動かし，進んで戸外で遊べるよう留意することが示されている．さらに，幼稚園教育要領解説の基本的な考え方に示されている「体験活動の重視，体育・健康に関する指導の充実による豊かな心や健やかな体の育成」（文部科学省，2018a，p.2）を目指すという点は，小学校における体育科の目標（文部科学省，2018b，p.142）と関連する部分が見られる．これらのことから，幼児のごっこ遊びにおいても，保育の領域「健康」の視点から検討することで小学校体育科へ円滑に接続する手がかりが得られると期待できる．

そこで，保育の領域「健康」という視点から見た幼児期のごっこ遊びについて，幼小接続を考えるならば，一つに小学校体育科における低学年の表現遊びが挙げられる．表現遊びは，「身近な題材の特徴を捉えてそのものになりきって全身の動きで表現したり，軽快なリズムに乗って踊ったりする楽しさに触れることのできる運動遊び」（文部科学省，2018c，p.32）として位置づいている．これについて，成瀬ら（2014，p.2）は「題材に『なりきる』ということは題材を『模倣』するという要素が入っており，低学年において，模倣すること自体が学習内容」であるとし，表現遊びにおける模倣の動きの種類を報告している．他方で，藤田（2017，p.98）は，幼児のごっこ遊びを「なりきる」と「模倣」を手がかりに研究しており，3 歳児の複数の事例から幼児が「なりきる」ことの意味には，①遊びのつなぎ，②遊びの変容のきっかけ，③遊びの継続性，④場と空間の共有，⑤ごっこ遊びの成立，⑥仲間関係の成立，⑦遊びへの参加条件，の 7 つがあることを示している．加えて，小田ら（2020，p.15）は，小学校低学年の生活科の実践と先行研究からごっこ遊びについて研究しており，幼児期は形の模倣から始まり，それらを組み合わせて内容を発展させていき，低学年期に入る頃には協同でストーリー性を帯びたごっこ遊びへ発展することを報告している．このように，保育におけるごっこ遊びに関する先行研究と，小学校体育科の表現遊びに関する先行研究には，共通して「模倣」というキーワードがあげられており，その共通性が円滑な幼小接続を支えるものであると考えられる．しかしながら，これらのごっこ遊びに関する先行研究には，幼小接続を見通した研究はごく僅かであり，とりわけ保育の領域「健康」の視点から研究されたものは見られない．そこで，本研究では幼児のごっこ遊びについて「健康」と「模倣」という視点から，幼児のごっこ遊びの実態を検討することとする．

ところで，保育の教育研究の方法は大きく分けて，エピソード記述，保育マップ型記録，エスノグラフィー，映像分析，ラーニングヒストリーの 5 つに整理されている（中坪編，2012；西岡，2014）．これらの方法は，幼児の理解に焦点化しているものであるため，活動の具体的な様相や，活動における保育者の支援などがどのように行われているのかなど，活動，幼児，保育者などを含めた活動そのものが見えづらい点が課題となっている．一方で，教科教育における授業研究には，授業解明研究や授業開発研究があり，そのうち授業解明研究はプロトコル作成により授業の事実を確定し，授業の構成と構造を解明する方法である（關，2017）．加えて，その特徴は「①授業における内容=教材に着目し，②その教材の学習を考察し，③学習の構成と構造を解明すること」（池野ら，2020，p.322）であるとされている．これらを踏まえ，本研究では，保育実践を分析する際に，教科教育における授業解明研究の方法を適応し，保育実践における活動の構成と構造から幼児の遊びの実態を明らかにすることとする．その際，保育の領域「健康」における幼児のごっこ遊びに着目し，活動の構成と構造を保育の領域「健康」と「模倣」の視点から検討する．

2. 研究の目的

本研究は，幼児のごっこ遊びに着目し，その事例における活動の構成と構造から,幼児の遊びの実態を明らかにすることを目的とした.そのために,学校教育における教科教育の授業解明研究の方法を適応し，保育の領域「健康」と「模倣」の視点から検討することとした.

3. 研究の方法

3.1 研究の手順

本研究では,先に述べた目的を達成するために,保育実践が収録された DVD から事例を抽出し,授業研究の方法を用いて分析する．具体的には,DVD の中の,幼児の活動場面より 2 つのごっこ遊びの事例を取り上げ,DVD のプロトコルを作成し事実を確定する．次に，事例におけるごっこ遊び中の幼児の様相及び保育者の支援の箇所を特定し,これらの構成と構造を示す．なお，構成とは，その場面における幼児あるいは保育者の行動の説明であり，構造とは，すべての構成をまとめた説明である（池野ら，2020 ; 山根ら，2020）. 最後に,作成したプロトコル，構成と構造からごっこ遊びの実態について考察する．また，年齢・発達の違いに伴い，遊び方や保育者の幼児への関わり方などに違いが予想されるため，2 つの事例の構成と構造を比較し，共通点と相違点をまとめることとする.

3.2 対象の事例

本研究で分析対象とする保育実践の事例は，河田聖良・片川智子・河合高鋭監修『保育内容：健康』（2019 年 11 月制作，アローウィン）（河田ら，2019）から取り出したものである．この DVD は幼児教育用の解説ビデオとして提供されており,幼稚園教育要領及び幼稚園教育要領解説等に従い,保育の領域「健康」について，実際の認定こども園における様々な幼児の活動の様子が収録されている．このため，本研究において保育の領域「健康」の場面としての構成と構造を分析することができると考える．また，DVD は「健康」に関するテーマごとにフリップで区分され，ナレーションを含む編集が行われている．このようなテーマの区分やナレーションなどの解釈には，当事者，観察者，分析者などそれぞれによって異なることがあるが，本研究では DVD に収録された幼児の活動そのものを取り上げて分析することとする．また, DVD に収録された事例を用いることで, 選択した対象事例を，誰もが閲覧することができるとともに，反復的に再生し確認，分析することが可能となる.

DVD の内容は次のようになっている.

【保育内容「健康」】
【オープニング】（2 分）
【遊び】（6 分）
・乳幼児の保育・年長の保育・保育者の支援
【リスクとハザード】（5 分）
・外遊びの時間・安全状況の確認・園庭の遊具の環境・予測できるリスクと予測不可能なハザード
【食事】（5 分）
・食育・料理体験・田植え体験
【睡眠】（2 分）
・睡眠環境の工夫・クワイエットタイム
【生活習慣の獲得】（10 分）
・健康づくりの基本・片付け・清潔（手洗いうがい）・あいさつ・排泄・家庭との連携
【健康状態の維持】（4 分）
・朝の健康観察・家庭との連携・保健師，看護師の役割
【アレルギー】（4 分）
・栄養士や除去担当の役割・家庭との連携

この DVD「健康」におけるテーマ【遊び】の中で，子どもの活動とその構成が含まれている場面を抽出した．本研究で分析対象とした事例は，ごっこ遊びをしている場面が確認できた乳幼児クラス 1 歳児の活動場面（再生時間 02’46～04’50）と,

年長クラス 5 歳児の遊びの場面（04’52～05’10）である．なお，他の年齢のクラスでは該当する場面が見当たらなかった．加えて，この 2 つの事例は，年齢・発達別の事例であるとともに，その遊びの活動の事例であるという点が重要となる．

4.　事例分析

4.1 事例 1：1 歳児による遊びの場面の分析

4.1.1 事例 1 におけるプロトコル

一つ目の事例は，1 歳児の遊びの場面について述べる．まず，プロトコルを表 1 に示した．なお，1 歳児は言葉の発達が未熟であるため，保育者の発話や，活動の様子を中心に記録している．

表 1　事例 1:1 歳児の遊びの場面のプロトコル（筆者作成）

人物	活動・発話
T	（説明）こういう遊びの中でも，たとえば，食べ物を友だちに食べさせてあげたりとか，そういうことは 0 歳児のときにはあまりなかった遊び方なので，そういう友だちとのかかわりややりとりとかも，だいぶこの時期に多く見られますね．
C1	●保育者のカゴに玩具を入れに来る
C2	●ボウルの中の玩具を保育者のカゴに入れる．
C3	●C3 がレンゲを使って食べる仕草をしている．
C4	●（場面かわり）ブロックで遊ぶ中で，ブロックを使って電話をかけている仕草をする C4 を映す．
N	食べる真似をしたり，ブロックで電話したりと，イメージを体で表す様子があります．
C5	●玩具が入ったザルを，おたまで混ぜて料理を作る真似をしている．
T	（C5 が遊んでいる玩具が入ったボウルを指差して）あ，お弁当はいっているね．
T	（説明）おままごとのコーナーとかでも，出すものとかも，いろいろできるものを増やしいくようしています．
C1	●C1 が保育者のところに，自分の持っている白いボックスから一つの玩具を保育者に渡す．
T	あ，ありがとう，C1 ちゃん．持ってきてくれたのね． ●保育者が C1 から玩具を受け取る．
N	自我の芽生えに伴い，何でも自分でしたがるようになるこの時期，お片付けの仕方に気づき，自分でしてみようとする気持ちが少しずつ育っていきます．
C6	C6 が保育者に玩具を渡そうと近づいてくる．
T	もってきてくれた．何があった．アイスクリームあった．
N	クラスのおままごとコーナー．ある工夫が． （カメラは，コーナー横のボックスを映し，ボックス側面に貼ってある写真を写す．）
	●保育室の側面にいろいろなボックスが置かれており，玩具をかたづけるところとなっている．ボックスには，写真が貼ってあり，どのようなものをどこにいれるとよいかがわかるようになっている．
T	何か探してるの？・・・あ，ブルドーザーあったね，C1 ちゃん．・・・． ●C1 が保育者に玩具をわたす．
T	（説明）1 歳児のお子さんにも視覚的にわかるように，ここに何が入っているという写真とかで飾っているので，教えるということまでもしていないし，必ず片付けないといけないともいっていないのですが，自然と写真とか見ながらお片付けしていますね．

C2	●（場面かわり）C2 が持っているおたまの中に保育者が玩具をいれて，それをボウルへ入れている．
N	こうした心身の発達や状態に合わせてそれぞれの子どもが安心して十分に遊びを楽しむことができるように，保育者が直接的・間接的に援助を行っています．

備考：C は子ども，T は保育者，N はナレーターを示し，聞き取れなかった発話は・・・で示している．●は，その場面の活動の様子である．

表 1 の場面は，幼児が野菜などの食べ物の形をした玩具や，ボウル，おたまなどの調理器具や食器，ブロックなどを使って遊んでいる様子が中心に取り上げられている．なお，冒頭の保育者の発言にある「食べ物を友だちに食べさせてあげたり…」という友達と直接関わって遊ぶ様子は，映像からは確認できなかったが，同じ空間で友達の存在を感じながら遊ぶ様子や，保育者と関わって遊ぶ様子が映っている．例えば，C1 や C2 は，保育者が持つカゴに玩具を入れに来るという活動を通して，保育者との関わりを持っている．

一方で，レンゲを使ってボウルに入っている食べ物の玩具を食べる仕草をする C3 や，玩具が入ったザルをおたまで混ぜて料理を作る真似をしている C5 は，保育室にある玩具を食事や料理に見立ててその動作を模倣している．このように，幼児はごっこ遊びを通じて「食」について触れており，食事への興味や関心が深まったり，食べる動作の習得に繋がったりしていると考えられる．

また C4 は，ブロックを電話に見立て，その動作を模倣している．このような 1 歳児の模倣について，前田（2020，pp.132-133）は，「ブロックや積み木を耳にあてる仕草をしていても，それが意味をもたない単なる仕草の模倣である場合」があるため，「一見，電話のまねっこ『電話ごっこ』をしているように見える仕草でも，子どもによって意味が違うことを保育士等はしっかりと理解して，一人ひとりに合った対応をしていくことが必要となる」と述べている．本研究の事例においても見られた，ブロックを受話器に見立てて耳に当てるという動作は，動作そのものを模倣しているのであって，電話で話をするという本来の機能や意味を理解しているとは必ずしも限らないが，幼児は目で見た情報をまずは動きで捉えて，その動作を模倣し，徐々にその動作と意味を結びつけていることが考えられる．そのため，保育者は「子どもの仕草の中にあるその子どもの思いに気付いたり，意味付けたりしていくことが重要な関わりや支援」（前田，2020，p.133）となる．

次に，C1 が保育者に玩具を渡しに行く場面である．玩具を持ってきた C1 に対し，保育士が「あ，ありがとう，C1 ちゃん．持ってきてくれたのね．」と声掛けをしながら受け取る場面である．この声掛けによって，それを見ていた C6 が影響を受け，その行動を模倣している．赤間（2016，p.3）によれば，幼児は「他の幼児がほめられている姿を見ることでほめられたいという欲求を刺激し，外発的に動機づけることができる」と述べていることから，C6 は自分も保育者に見て欲しい，認められたい，といった承認欲求がその行動の動機づけになったと推察する．なお，その場面のナレーションでは「自我の芽生えに伴い，何でも自分でしたがるようになるこの時期，お片付けの仕方に気づき，自分でしてみようとする気持ちが少しずつ育っていきます」とあるように，発達の一つとして捉えることもできるが，その発達を捉えて支援することが大切であると考える．

保育者の支援に関係して，事例 1 の後半では，保育者が，1 歳児にも視覚的にわかるように写真を飾っているという環境設定の工夫を説明している．ここで述べられている「自然と写真とかを見ながらお片付け」には，意図的に用意された間接的支援があるといえる．つまり，幼児は自然と片づけができるようになるのではなく，保育者が視覚的に工夫した環境設定によって，幼児が自ら片付けができるようになったと考えられる．このよ

うに，保育者の環境設定により，幼児は生活の仕方を知り，自分で生活の場を整えられるようになっていくことがわかる．また，C2 が持っているおたまの中に保育者が玩具をいれて，それをボウルへ移し入れて遊んでいる場面がある．ここでは，保育者が直接遊びに関わりながら幼児の遊びを広げている場面が見られた．以上のように，表 1 のプロトコルから,幼児の遊びの様相と保育者の様々な支援が確認できた.

4.1.2 事例 1 における構成と構造

次に，事例 1 における幼児の遊びに関する活動及び保育者の支援の箇所における構成と構造を表 2 に示す.

表 2　事例 1 における構成と構造
（筆者作成）

<table>
<tr><th>場面</th><th>様相</th><th>構成</th><th>構造</th></tr>
<tr><td>1</td><td>C6 が C1 を見て, 玩具をカゴに入れる</td><td>反映模倣</td><td>他者の模倣</td></tr>
<tr><td>2</td><td>C3 の食べる仕草</td><td rowspan="3">見立て</td><td rowspan="4">動作の模倣</td></tr>
<tr><td>3</td><td>C4 の電話をかける仕草</td></tr>
<tr><td rowspan="2">4</td><td>C5 がおたまでかき混ぜる</td></tr>
<tr><td>T「あ，お弁当はいっているね」</td><td>声掛け</td></tr>
<tr><td>5</td><td>保育者がおたまに玩具をいれ，C2 がボウルへ移す</td><td>保育者の参加</td><td>遊びの共有</td></tr>
</table>

表 2 の構成と構造から，事例 1 は，5 つの場面があり，構成は，反映模倣→見立て・声掛け→保育者の参加である．また，それぞれの構成をまとめた構造は，他者の模倣→動作の模倣→遊びの共有，の 3 つに分けられた．なお，構成と構造における反映模倣及び他者の模倣とは，幼児が模倣する対象が「他者」である模倣を他者の模倣とし，他者の模倣には相互模倣と反映模倣があり，「互いに真似し合っているか」と「どちらか一方が真似しているか」という視点で分けられる（成瀬ら，2014 ; 笠井ら，2018）．場面 1 の場合，他の友達がしていることを真似したり影響されたりしていた様相が見られたことから，構成は反映模倣であり，その構造は他者の模倣とした.

また，場面 2～4 では，幼児それぞれが，食事，電話，料理に見立てて遊んでおり，どれも日常生活において身近な動作の模倣であることがわかる．このことから，幼児自身が観察し，肌で感じる日常の体験が，遊びとして表出する動作の模倣の原動力になっていると考えられる．加えて，料理をする C5 に対して，保育者が「お弁当入っているね」と声掛けをしており，その動作の模倣が「食事」に関係しているということを意識し，「お弁当」であるかもしれないという意味づけをしていることがわかる．これらのことからも，ごっこ遊びの中で,幼児が食事に関して興味や関心を深め,楽しみながら食べる動作の模倣がその動作習得の一環になっていると考えられる.

場面 5 は，C2 が持っているおたまの中に保育者が玩具をいれ, C2 がおたまに入った玩具をボウルへ移し入れるという遊びを繰り返している場面である．幼児と保育者で，遊びを共有し，同じ動作を繰り返し行いながら遊んでいる.瀬野（2010, pp.60-61）は，遊びの中で共通のテーマをもって楽しむ過程には，相互模倣や繰り返しがある場面が子ども集団に楽しさが伝染していくことを述べている．場面 5 では，保育者が遊びに直接参加することで，幼児と遊びを共有し共通のテーマをもって楽しみ，周囲の幼児にも楽しさが伝染し，間接的な支援になっていることが推察された.

4.1.3 事例 1 における領域「健康」

ここまで，事例 1 のプロトコルと，構成と構造を示した．これらを踏まえ，以下では保育の領域「健康」について照査していく．事例 1 では，遊びの中に他者の模倣が見られたり，保育者と遊びを共有したりして，幼児が様々な遊びを見つけながら楽しんでいる様子が見られた. このことから，「健康」の内容（文部科学省，2017，p.11）に示される「（1）先生や友達と触れ合い，安定感をもって行動する」ことや「(4) 様々な活動に親しみ，楽しんで取り組む」ことに当てはまるといえる．また，食べることや料理，お弁当などに見立てて遊びの中で食事への興味や関心を広げていたことから「（5）先生や友達と食べることを楽しみ，食べ物への興味や関心をもつ」ことや「（7）身の回りを清潔にし，衣服の着脱，食事，排泄などの生活に必要な活動を自分でする」ことに関連しているといえる．例えば，レンゲを口に運ぶ動作は 1 歳児にとって自分で食べる動作の上達のきっかけになると考えられる．さらに，カゴに玩具を片付ける様子が見られたことから「（8）幼稚園における生活の仕方を知り，自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する」ことにも関連していると考えられる．以上のことより，事例 1 は保育の領域「健康」に示される内容の 5 つの項目に関連していた.

4.2 事例 2：5 歳児による遊びの場面の分析

4.2.1 事例 2 におけるプロトコル

事例 2 は年長クラスの 5 歳児がごっこ遊びをする場面である．表 3 は，そのプロトコルである．

表 3 に示した場面は，幼児が自由に室内で遊んでいる中で，3 人の男児がごっこ遊びをしているところである．保育室の一角に，おままごとなど様々な遊びの工夫ができるようなキッチンや机，調理器具などが配置された「食」に関する環境が設定されている．また，そのスペースにはマットが敷かれており，幼児はマットの手前で上履きを脱いで遊んでいる．マットでは上履きを脱いで遊ぶという，その環境に沿った生活の仕方や遊び方を選び，遊びの中で日常生活に必要な靴を着脱すう行動をしている．

表 3　事例 2：5 歳児の遊びの場面のプロトコル
（筆者作成）

人物	活動・発話
N	こちらは年長のクラス．室内では，思い思いの遊びに熱中しています.
	（カメラは，保育室全体映し， それぞれの場所で遊ぶ様子が写る．）
C1 C2 C3	●（場面かわり）C1 と C2 と C3 の 3 人でキッチンなどの玩具があるスペースで，上履きを脱いで遊んでいる. ●C1 は頭にボウルを被り，C2 はズボンの上からスカートを履いている.
C3	・・・これを使わないとね，じゃぁ，まず，それして・・・ ●C2 を見てスカートを持って来て履く.
C3	はぁ!よし, できあがった！てっててーん. ●スカートを履き, 鍋を頭に被って変身した姿を見せる.

備考：C は子ども，T は保育者，N はナレーターを示し，聞き取れなかった発話は・・・で示している．●は，その場面の活動の様子である.

そこでは，C 1 はボウルを頭に乗せ，C2 はスカートを衣装にして, C3 はスカートとボウルを身に付けて各々が保育室に用意されているものを使って，何かに変身している様子が確認できる． 中でも C3 は，C1 や C2 がボウルを頭にかぶってスカートを履いて遊んでいたのを見て，一緒になってボウルを被り，自らも似たようなスカートを履いて変身した姿をカメラに披露した. 小原ら(2021，p.26）は，「同じ空間（場）やシュチュエーションにおいて表現することの喜びや自分の表現を認められることが他者に伝播し，共有という形になると考えられ，イメージの世界においては，共創という形に変化していく」と述べている．この

ことからも，3 人の関係性の中で遊びを共創しており，それぞれが思い描くイメージを互いに真似し合いながら遊ぶ様子が見られることから，幼児は他者と遊びを共有しながら，他者からの様々な情報を遊びの深まりや広がりのヒントにしていることが考えられる．

加えて，C3 は，衣装を身につけて変身した様子を「てってれーん」とカメラに向けて披露していた．C3 が発表者，カメラマンが観客という役割ができ，C3 自身が何かに「なりきる」姿を他者に見せる行為を行っていた．「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（文部科学省，2010）では，幼児期から児童期にかけて，遊びでの関わりの中で気付きが生まれ，学びの芽生えから次第に自覚的な学びへと発展していく時期であるとまとめられている（p.10）．これを踏まえると，C3 は他者とのかかわりの中で遊びの広がりに気付き，自他の役割を捉えていることから，自覚的な学びへ発展していく過程であることが推察される．

4.2.2 事例 2 における構成と構造

次に，事例 2 における幼児の遊びに関する活動及び保育者の支援の箇所における構成と構造を表 4 に示す．なお，事例 2 で登場する幼児は 3 名であるが，遊びの内容と発話が確認できた C３を中心に分析する．

表 4　事例 2 における構成と構造
（筆者作成）

場面	様相	構成	構造
1	3 人で遊んでいる．	友達と遊ぶ	遊びの共有
2	「これを使わないとね，じゃぁ，まず，それして…」	相互模倣	他者の模倣
3	「よし，できあがった！てってててーん」	なりきる	発表

表 4 の構成と構造から，事例 2 は，3 つの場面があり，構成は，友達と遊ぶ→相互模倣→なりきるである．また，それぞれの構成をまとめた構造は，遊びの共有→他者の模倣→発表，の 3 つに分けられた．

まず，3 人の幼児が遊んでいる場面 1 は，上述したように，各々がどのような遊びをするかを探求し，選択している様子があり，自分が見つけた楽しい遊びを 3 人で共有して遊んでいることから，構造は遊びの共有とした．また，遊びの中で衣服や靴の着脱が見られ，互いにその環境での生活の仕方や遊び方を共有していることが考えられる．

場面 2 は，C3 が「これを使わないとね，じゃぁ，まず，それして…」と他 2 人と遊び方を共有しながら，お互いに真似し合う相互模倣が見られたため，場面 2 の構造は他者の模倣とした．

場面 3 では，C3 が「はぁ！よし，できあがった！てってててーん」と言いながら，カメラに向かって自分の変身した姿を披露する場面である．寺山（2004, p.19）は，「なりきる」には表出レベルと表現レベルの 2 つがあることを示しており，「『他に伝達しようという意識がない』表出レベルから，客体に向けた『伝達を含む』表現レベルへ移行できる指導を検討する必要が求められる」と述べている．このことから，スカートを身にまとい変身した姿を発表した C3 は，表現レベルに近い「なりきる」姿であると考えられる．さらに，カメラマンという視聴者，いわば客体の存在によって，変身した姿を発表し，表現レベルの「なりきる」が促された可能性が挙げられる．これを，保育者の支援として置き換えるならば，保育者は，幼児の遊びの客体として参加したり，発表の機会を用意したり，幼児同士を主体・客体として相互に認識するよう工夫したりすることなど様々な支援が考えられる．しかし，その具体的な支援の手立てや方法については，今後検討が必要である．

4.2.3 事例 2 における領域「健康」

ここまで，事例 2 のプロトコルと，構成と構造を示した．これらを踏まえ，以下では保育の領域

「健康」について照査していく．事例 2 では，友達と同じ空間で遊びを共有したり，お互いの遊び方を真似し合って他者を模倣したりしながら「なりきる」ことを楽しんでいる様子が見られた.「健康」のねらい「（1）明るく伸び伸びと行動し，充実感を味わう」について幼稚園教育要領解説（文部科学省，2018a，p.136）では，「明るく伸び伸びということは，単に行動や言葉などの表面的な活発さを意味するものだけではなく，幼稚園生活の中で解放感を感じつつ,能動的に環境と関わり，自己を表出しながら生きる喜びを味わうという内面の充実をも意味するものであり，自己充実に深く関わるものである」とされている．このことから，事例 2 は「健康」のねらいに示されている能動的な遊びの中で自己を表出し充実感を味わっている姿であると推察できる．また，幼児が 3 人で相互に模倣することを楽しんでいたことから,「健康」の内容（文部科学省，2017，p.11-12）に示される「（1）先生や友達と触れ合い，安定感をもって行動する」ことや「（4）様々な活動に親しみ，楽しんで取り組む」ことに当てはまるといえる．さらに，幼児はマットの手前で上履きを脱ぎ，その環境に沿ったルールを理解して遊び方を選択していたり，用意されたスカート等を身に付け，自分の思い描いたなりたいものになるために，衣装を着用したりする姿が見られた．このことから，「（8）幼稚園における生活の仕方を知り，自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する」ことや「（7）身の回りを清潔にし，衣服の着脱，食事，排泄などの生活に必要な活動を自分でする」ことに関連していると考えられる.加えて，幼児が遊ぶスペースには，調理器具や食に関わる玩具が揃えられていたことから，「（5）先生や友達と食べることを楽しみ，食べ物への興味や関心をもつ」ように，保育者による意図的な食に関する環境設定が行われていたと考えられる．以上より，事例 2 は保育の領域「健康」に示されるねらいと，内容の 5 つの項目に関連していたと考察できる．

4.3 結果及び考察

本研究では，1 歳児と 5 歳児の事例から保育の領域「健康」における幼児のごっこ遊びの様相と保育者の支援における構成と構造を示し,「健康」と「模倣」の視点を踏まえて検討した． 2 つの事例を比較した結果，以下 3 点において共通点と相違点がみられた.

1）他者との関わり

2 つの事例の構造には, いずれも「他者の模倣」と「遊びの共有」が共通している．どちらも他者との関係の中で行われるものである．本研究における「他者の模倣」の実態は，1 歳児の事例に関しては一方的に真似する反映模倣，5 歳児の事例では相互に真似し合う相互模倣である違いがあったが，いずれも友達を模倣するものであった．また，「遊びの共有」については，1 歳児の事例では遊びを共有する対象が保育者であり，5 歳児の事例では友達と共有している点に違いがあった．古谷ら（2004，pp.57）は，幼児のごっこ遊びにおける対人関係について，一方向から双方向，循環的人間関係へと進展すると述べている．これらのことからも，幼児のごっこ遊びにおいて他者との関わりが重要であることが確認でき，その関わり方や対象は，年齢や発達によって変化することが示唆された. なお, 幼児の他者関係に関する研究（例えば，小林，2020）は数多く見られるものの，とりわけごっこ遊びの事例における他者との関わりを検討したもの（例えば, 林, 2018；前田, 2020）は希少である．そのため，本研究のような活動の構造から活動そのものを分析することが幼児の活動の傾向とその支援を考える上で価値のあるものだと考える.

2）幼児の様相と保育者の支援

本研究では，保育の領域「健康」における遊びについて，年齢及び発達が異なる幼児の事例を分析した．そのため，年齢及び発達の違いから，遊び方の違いは見られるものの，両方の事例においてごっこ遊びの中で模倣を楽しむ様子が見られた. 1歳児の事例では, 日常の動作の模倣が確認され,

対して5歳児の事例では，様々なものを身にまとい変身した自分を披露する姿（表現レベルの「なりきる」）が確認できた.

また，保育者の直接的な支援について考察すると，1 歳児の事例では，幼児による動作の模倣に対する意味付けなどの声掛けや，幼児と遊びを共有して繰り返しの遊びを楽しむことで，ごっこ遊びに広がりが生まれることが示唆された. 一方で，5 歳児の事例では，保育者の直接的な支援の場面は無いものの，幼児が遊びを発表するという構造が示されたことから，保育者による幼児の表出から表現に促す支援について検討する必要性があげられた.

3）保育の領域「健康」

2 つの事例を保育の領域「健康」の内容（文部科学省，2017，pp.11-12）と照査すると，共通して次の 5 つの内容に当てはまった.「（1）先生や友達と触れ合い, 安定感をもって行動する」こと,「（4）様々な活動に親しみ，楽しんで取り組む」こと,「（5）先生や友達と食べることを楽しみ，食べ物への興味や関心をもつ」こと,「（7）身の回りを清潔にし，衣服の着脱，食事，排泄などの生活に必要な活動を自分でする」こと,「（8）幼稚園における生活の仕方を知り，自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する」ことである．これらのことから，ごっこ遊びでは，保育者や友達と触れ合う安定感の中で，様々な活動に親しみ楽しみながら，遊びを通して食事や衣服の着脱などの生活習慣に触れることのできる活動であることが示唆された.

他方で，小学校の体育科を見通した「健康」という視点からみると，体育科への接続としては不十分であった. 小学校体育科の低学年においては，領域の名称に「〇〇遊び」がつき，「『遊びを通して学ぶ』という論理のもとでおこなわれる幼児教育との接続が想定されている」（浅尾ら, 2018, p.16）. 例えば，幼児期のごっこ遊びにおける「なりきる」は，体育科における表現遊びの指導内容に示されている「なりきる」に関係するものである．そのため，ごっこ遊びのような運動的側面が少ない遊びにおいても，体育科に円滑に接続することを意図するならば，本研究の事例では見られなかった「（2）いろいろな遊びの中で十分に体を動かす」ことや「（3）進んで戸外で遊ぶ」ことなどの運動的な側面を支援したり，「（9）自分の健康に関心をもち，病気の予防などに必要な活動を進んで行う」ことや「（10） 危険な場所，危険な遊び方，災害時などの行動の仕方が分かり，安全に気を付けて行動する」ことなど，自らの健康と安全に関心を持たせたりする支援の検討も必要であることが示唆された.

5.　まとめと今後の課題

本研究は，教科教育研究の授業研究の方法を用いて，保育の領域「健康」における幼児の遊びの構成と構造からその実態を明らかにすることを目的とした．具体的には，幼児のごっこ遊びの実態について，保育の領域「健康」と「模倣」の視点から検討するために，「健康」に関する DVD に収録された保育実践から 2 つの事例を取り上げ，教科教育研究の授業解明研究の方法で幼児の活動を分析した.

その結果，他者との関わり，幼児の様相と保育者の支援，保育の領域「健康」の 3 点において，共通点と相違点を示すことができた.

まず, 2 つの事例における他者との関わりには，「他者の模倣」と「遊びの共有」が共通して見られた．このことから，ごっこ遊びにおいて他者との関わりが重要であり，その関わり方や対象は，年齢や発達によって変化することが示唆された.

また，幼児の様相と保育者の支援については，共通して模倣する姿があった．1 歳児の事例では見立てて遊ぶ動作の模倣が見られたのに対し, 5 歳児の事例では何かに変身して「なりきる」様子が見られた．それに伴い，保育者の支援の方法についても, 環境設定などの間接的な支援はもとより，直接的な支援において，1 歳児の事例では幼児と遊びを共有しながら動作を意味づける声掛け, 5 歳児の事例では保育者による幼児の表出から表現に促す支援について検討する必要性があげられた.

最後に，2 つの事例と保育の領域「健康」とを照査した結果，両事例とも「健康」に示される 5 つの内容に関連していることが明らかとなった．このことから，ごっこ遊びでは，保育者や友達と触れ合う安定感の中で，様々な活動に親しみ楽しみながら，遊びを通して食事や衣服の着脱などの生活習慣に触れることのできる活動であることが示唆された．また，本研究で取り上げた事例は，いずれも室内であったが，体育科を見据えた領域「健康」という点から，自らの健康に関心を持ち，安全に配慮しながら，体を十分に動かして戸外で行う遊び方に発展させられるような支援を検討する必要が示唆された．

今後の課題として，年齢や発達に応じた具体的な支援の方法について検討が必要である．また，本研究では幼児教育と小学校教育を比較したものではないため，幼小接続を図る上では，両者からの実践とその支援の検討が求められる．なお，本研究の限界は，DVD の事例を分析対象としたことで，幼児の活動全てを分析できなかった点にある．このため，結果の解釈には留意が必要である．

引用・参考文献

明石英子（2021）「遊びを通した子ども理解に関する一考察：領域「人間関係」と幼児期の終わりまでに育って欲しい姿「協同性」に着目して」『四天王寺大学紀要』69，pp.445-460.

赤間健一（2016）「保育内容「人間関係」から考える意欲の育成のための条件 ： 小学校との連携を視野に入れた外発的な意欲」『福岡女学院大学紀要 人間関係学部編』17，1-5.

藤巻裕昌（2018）「幼児期の運動遊びにおける教材研究 ： 体育学の視点からみた保育内容領域「健康」の教材の考察を中心に」『名古屋女子大学紀要 家政・自然編，人文・社会編』64，pp.223-235.

藤田清澄（2017）「3 歳児における「なりきる」ことの意味」『盛岡大学紀要』34，pp.93-100.

林友子（2018）「ごっこ遊びにおける発話調査報告：関係性とストーリーつくりに着目して」『帝京科学大学教育・教職研究』4（1），pp.29-36.

今由佳里・尾辻菜摘子（2021）「幼稚園における手遊び歌に関する実践的研究 ：「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」領域との関連」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』72，pp.29-48.

池田裕恵（2018）『子どもの元気を取り戻す 保育内容「健康」改訂第 2 版：乳児期から幼児期の終わりまでを見通して』．杏林書院.

池野範男・笠井利恵・山根悠平（2020）「保育所・幼稚園における活動分析：活動の構成と構造」『日本体育大学大学院教育学研究科紀要』3（2），pp.315-334.

河田聖良・片川智子・河合高鋭監修（2019）「保育内容：健康」『アローウィン DVD カタログ（映像教材）2020 年版』，アローウィン.

河邉貴子（2010）『遊びを中心とした保育：保育記録から読み解く「援助」と「展開」』，pp.160-168，萌文書林.

笠井利恵・栗原知子・滝沢洋平・笠井里津子・近藤智靖（2018）「小学校 1 年生の表現リズム遊びにおける模倣の動きに関する研究:分類基準表の作成と動きの変容に着目して」『日本体育大学大学院教育学研究科紀要』2（1），pp.157-174.

厚生労働省（2017）『保育所保育指針』フレーベル館.

小林真（2020）「乳幼児期の人間関係の発達」『富山大学人間発達科学部紀要』15（1），pp.157-166.

小谷牧子・住野紀子・伊藤美佳・糸州理子・奥村隆介・瀧川光治・玉置哲淳（2004）「保育場面におけるごっこ遊びの関係活動モデルによる分析：年齢ごとの内的操作・関係面の分析から」大阪教育大学幼児教育学研究室『エデュケア』24，pp.47-66.

溝口綾子（2013）「幼児教育における環境の意味」日本教材学会編『教材事典』東京堂，pp. 568-

569.
前田綾子（2020）１歳児のごっこ遊びに関する一考察―保育士との関係と模倣に着目して―奈良学園大学人間教育学部『人間教育』，3（7），131-135.
文部科学省（2010）「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf）（2021 年 10 月 8 日閲覧）.
文部科学省（2017）『幼稚園教育要領（平成 29 年 3 月）』フレーベル館.
文部科学省（2018a）『幼稚園教育要領解説（平成 30 年 2 月）』フレーベル館.
文部科学省（2018b）『小学校学習指導要領』東洋館出版社.
文部科学省（2018c）『小学校学習指導要領解説 体育編（平成 29 年 7 月）』東洋館出版社.
明神もと子（2005）「幼児のごっこ遊びの想像力について」『釧路論集 北海道教育大学釧路校研究紀要』37，pp.143-150.
中坪史典編著（2012）『子ども理解のメソドロジー：実践者のための「質的実践研究」アイディアブック』ナカニシヤ書房.
成瀬麻美・寺山由美・宗宮悠子（2014）「表現遊びの即興時に現れる「模倣」の種類：4 校の小学校 2 年生を対象に」『スポーツ教育学研究』34（1）pp.1-11.
奈須正裕（2017）「新しい幼稚園教育要領が目指すもの」津金美智子編著『平成 29 年版新幼稚園教育要領ポイント総整理』東洋館出版社, pp.1-8.
内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館.
西岡けい子（2014）「保育実践のなかで子どもをとらえる」日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社，pp.326-329.
小原幹代・本山益子・杉浦慶子（2021）「身体表現遊びを積み重ねることの意味」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』54, pp. 19-28.
小田恭子・加納誠司（2020）「生活科における対象と豊かに関わるための「ごっこ遊び」の研究」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』5, pp.9-16.
坂井莉野（2018）「幼稚園教育要領等の改訂と教員養成の在り方 : 領域「健康」と小学校「体育」との関連から」『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』40，pp.171-185.
瀬野由衣（2010）「2～3 歳児は仲間同士の遊びでいかに共有テーマを生みだすか：相互模倣とその変化に着目した縦断的観察」『保育学研究』48（2），pp.157-168.
關浩和（2017）「教科教育の授業研究」日本教科教育学会編『教科教育研究ハンドブック』教育出版，pp .142-147.
研攻一・佐藤由紀（2016）「ごっこ遊びの見立て行動を育てるための保育の試み」『羽陽学園短期大学紀要』10（2），pp.29-49.
寺山由美（2004）「ダンス教育における自己表現について：「なりきる」を手がかりに」『体育・スポーツ哲学研究』26（1）, pp.13-23.
山根悠平・笠井利恵・池野範男（2020）「保育の領域「環境」における活動分析：幼児の比較・関連付けに着目して」『日本体育大学大学院教育学研究科紀要』3（2），pp.335-344.
山本智子（2018）「保育・幼児教育における子どもが健康であるための発達支援：保育内容「健康」の指導法を中心とした検討に基づいて」『埼玉学園大学紀要人間学部篇』18，pp.173-182.
谷田貝公昭編（2019）『保育用語辞典』, 一藝社.